

氏名 中村 直人 (なかむら なおと)

職名 教育学科 准教授 (任期制)

最終学歴 関西学院大学大学院博士課程後期課程文学研究科
日本史学専攻

学位 博士 (歴史学)
論文題目: 「中世寺院史の研究—高野山教団の権力構造の
分析を中心に—」



主な職歴 2001年 関西学院大学非常勤講師 (至2013年3月)
2004年 神戸国際大学非常勤講師 (至2013年3月)
2005年 高野山大学非常勤講師 (至2009年3月)
2009年 関西大学非常勤講師 (至2013年3月)
2010年 大阪教育大学非常勤講師 (至2013年3月)
2013年 関西学院大学教育学部准教授 (現在に至る)

専門分野 日本中世史 (寺院史)

主な著書・論文等

- 1 「諸供領薦次番付書について」(単著) (関西学院大学人文学会『人文論究』第48巻第2号 1998年)
- 2 「中世後期金剛峯寺の権力構造」(単著) (『ヒストリア』第173号 2001年)
- 3 『住吉松葉大記(上・中・下)』(共編) (大阪市史料調査会 2000・2002・2004年)
- 4 『改訂 九度山町史(通史編)』(共著) (九度山町 2009年)
- 5 「中世日本の死生観」(単著) (近藤剛編著『現代の死と葬りを考える—学際的アプローチ—』ミネルヴァ書房 2014年)
- 6 『奈良市璉城寺の歴史と下間家文書目録—平城京紀寺と西本願寺坊官下間家—』(共編) (大阪樟蔭女子大学璉城寺(紀寺)総合学術調査団 2015年)
- 7 「中世の地方寺院と地域—鎌倉・南北朝期の撰津国勝尾寺と周辺地域—」(単著) (荘園・村落史研究会編『中世村落と地域社会—荘園制と在地の論理—』高志書院 2016年)
- 8 『歴史のなかの上ヶ原 西宮市上ヶ原、古墳から震災まで』(単著) (関西学院大学出版会 2016年)

学びの場としての教育学部

中 村 直 人

教育系の諸学問の素養がなく、小・中・高で実際に教える機会のなかった私にとり、教育学部は教わることが非常に多く、得がたい経験をすることができ、本当にありがたい「学びの場」でした。そして、出会った教職員の皆様からは、親身なるご教示とご助力を多く頂戴しました。

本学部の教職員と学生が自主的に催す未来塾は、教育分野に関して多くのことを学ぶことができる、私にとっては大変貴重な場でした。向上心ある学生とともに先生方のお話を謹聴し、蒙を啓かれました。知らなかったことばかりでした。それにもかかわらず、講演後のグループ討論では、さもよく知っているかのように振る舞い、学生を「指導」しました。

けれども、模擬面接の指導は誤魔化しがききません。これは無理だと観念し、キャリアセンターの先生方にご助力をお願いしました（泣きつきました）。先生方は、キャリアセンターが実施している面接指導の傍聴を、快くお許しくださいました。個人面接と集団面接の両方を拝見し、ご教示をいただき、必要な資料も頂戴しました。面接官役としての質問もさせていただきました。ただ聴いているだけでは許していただけない、まさに教育的なご配慮でした。

体験実習と実地教育研究の授業を担当したことも、私の教育理解に非常に役立ちました。小学校の教員となるには何を学ばなければいけないのか。授業担当者としては誠に頼りない限りですが、その一端を学ぶことができました。

実習先への視察訪問は、当初はひどく緊張しました。私の固定観念上、校長先生といえば雲上人です。その校長先生に親しく校長室へ招かれ、ご挨拶と懇談をします。視察先の校長先生・教頭先生からは、小学校のかかえる問題、地域の特色、学校の歴史など、本当に様々なことをご教示いただきました。また、視察の前には訪問先の周辺を歩き回り、付近の地形や寺社・墓地・用水路などを観察する機会を得ました。私にとって視察訪問は、職務を果たすことはもちろんですが、地域について学ぶ恰好の機会ともなりました。

最近、『歴史のなかの上ヶ原』を上梓しました。

関西学院の位置する上ヶ原台地とその周辺の歴史について、古代から現代まで六章にわたってまとめた、地域史の本です。まさに「拙著」ではありますが、教育学部で教わったこと、経験したことが、執筆する上での大きな下敷きになりました。

教育学部の学生から、日本史は暗記科目であること、したがって面白くもなく、明確に苦手であるとの声を、しばしば聞きました。教科書を読むだけでは面白いはずはなく、歴史に関する本を読んでもらいたいところですが、現状はなかなか無残です。

そこで本書では、歴史に興味を持ってもらうための一手段として、身近にある歴史の痕跡から出発し、やがて全国的な歴史の大きな流れに気づいてもらう構成をとりました。また、地域史の学習は小学校で行われますし、中学・高校の歴史教育においても地域史の知識は必要なはずですが、学校教員や生徒が地域史について調べるさいに役立つように配慮しました。こうした意識は、教育学部の先生方との交流のなかで、自然と育まれたように思います。

とくに鳴尾村の義民に関する章は、本学部に所属していたからこそ、執筆することができました。視察で歩き回ったことにより、鳴尾地区への興味が深まりました。また、先生方のご教示により、鳴尾村の義民伝承が現在も地域において生きており、学校教育の場で教えられていることを知りました。これらが相俟って、本書でとりあげることの意義を見出すことができました。

教育学部のお世話になるまで、私は大学で日本史だけを教えてきました。そのさい、学生たちがどのような教育を経て今この場にいるのか、大まかにでも知っておかないと、大学での教育は上手く行かないのではないかと感じていました。それと同時に、自分には小・中・高について知る機会はずいぶん少なかったとの、無念な思いもありました。

そのような折に教育学部のお世話になりましたことは、天佑に近い意味が私にはありました。本学部での経験は、今後、様々な形で、私自身の研究や世の中の捉まえ方などに影響を与えるものと思われまます。「学びの場」に深謝申し上げます。